

一、次の各問いに答えなさい。

問一 次の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ケーキをキントウに配分する。
- ② ハクアイの精神を心がける。
- ③ スープがサめる。
- ④ おこづかいをチヨキンする。
- ⑤ 人間の個性をカクイツ化してはならない。

問二 次の——線部のカタカナと同じ漢字を用いる熟語を、後のア～エの中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- ① ゴウ理的に話し合いをする。
ア 強力 イ 号令 ウ 郷里 エ 合意
- ② 自分の将来を暗ジしている。
ア 自立 イ 字形 ウ 指示 エ 辞典
- ③ 不トウなあつかいを受ける。
ア 倒立 イ 当選 ウ 登校 エ 力投

- ④ 子供のわがままに閉コウする。
ア 口内 イ 公園 ウ 校舎 エ 効力
- ⑤ 健全な心をハグクむ。
ア 教室 イ 学校 ウ 習得 エ 育成

問三 次の——線部と同じ意味・用法のものを、後のア～エの中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 彼はただ笑っているばかりで、話にならなかった。
ア 旅行のための交通費は二万円ばかりかかった。
イ 彼は会社で大きなことばかり言っている。
ウ ぼくは、さつき学校から帰ったばかりだ。
エ 走り終わったばかりで、のどが渴かわいている。
- ② 悪いと知っていながら、なぜ改めないのか。
ア 彼は能力がありながら結果を残せないでいる。
イ 苦勞を、なみだながらに語り出した。
ウ あの家は昔ながらのたたずまいをしている。
エ 本を見ながら食事するのはよくない。

③ わずかでもいいから、着実に前に進もう。

ア 昼食はラーメンでも食べようか。

イ いくら呼んでも返事が聞こえない。

ウ そんなことは誰でも知っているよ。

エ 一度でもいいから空を飛んでみたい。

④ 彼女はイギリスに留学するらしい。

ア 彼の態度は実に中学生らしい。

イ かわいらしいスニーカーだね。

ウ 天気予報によると、明日は雪らしい。

エ 自分らしい生き方を選ぶ。

⑤ 今日は一日、晴れになりそうだ。

ア 今日の午後は大雨が降るそうだ。

イ 今日の部活動は中止になるそうだ。

ウ 今日は気分よく過ごせそうだ。

エ 今日は彼女の誕生日だそうだ。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 人生といえはすぐ、まっすぐな線のように思い浮かべるくせから離れる必要がある。人生のある時期までは無垢で、ある時期から汚れたすというのはうそである。ある時期までは幸福で、ある時期から不幸になるというのもうそである。だいいち、毎日がぜんぶ幸福、ぜんぶ不幸などというのは、きつとたいくつでやりきれないだろう。

a 勤勉**Ⅰ**というのは 美徳の一つではある。多くのひとが「ワーカホリック」(仕事中毒)といわれるまでに勤勉にはたらく。が、そのモチベーションについては、がちがちの自己解釈を加えないほうがいい。

b Ⅱ、満ちたりた将来のためにいままでできるだけがんばっておこうという論理、これは未来の幸福のために現在をとてつもなく貧しくする論理である。そのような論理にしたがつて生きるひとたちは、老いれば老いたで、今日じぶんがあるのは……と過去をふりかえるのだろう。Ⅲ 過去の努力の延長線上にいまのじぶんを設定するのだろう。いってみれば、じぶんを過去の「実績」から逃げられなくするのだ。

Ⅳ、わたしたちはいつも同じ線の上にはいてはいけないのだろう。同一のシナリオの枠内にいなければならないのだろう。同一の存在でいなければならないというこの強迫観念が、わたしたちをしばしばひどい不安に駆りたてる。

② 不安。それはつねに、未来を思い描く想像力と切り離しがたく存在する。たとえば、若いひとが老いということを思い描くとき、不安という気分よりもむしろ唾棄したい気分なのだろう。たとえばじぶんより二、三歳上のひとを「おばさん」と呼ぶ。高校生が大学生を、中学生が高校生を、である。じぶんが二、三年でその歳になるその年齢のひとを「おばさん」と呼び棄てるのである。これはすぐやってくるじぶんの未来に絶望しているし以外のなものでもない。そのアグレッシブな口調にもかかわらず、暗い現在だ。そこでは、なにかにしたいというそのイメージを欠いたまま、いまのじぶんから抜けだすこと、別のじぶんになることを希望するしかない。

③ では、満ちたりた老いらくというのは、明るい現在だろうか。右でみたように、老いの充実というのは、多くの場合、過去の栄光の記憶にのっかっている。あのときがんばっておいだから、いまこうしていられる……。『幸福な老年』とは、いままでのじぶんの業績に満足している状態である。つまり、過去の記憶とそこから生じた財によっかかって生きることである。ということは、別の生きかたというものをあらかじめふうじこめる生きかたのことである。それはすでに確定した過去の延長線上でなりたつ現在であり、したがってこの充実した老

いはますます限定された狭い世界に入っていく。変化すること、存在がめくれることをみずからに禁じるような生きかたである。^④

これまたもう一つの貧しさではないか。ファッションというのが、記憶を断つて、たえず一から、いやゼロからやりなおすこと、社会から与えられたアイデンティティの衣を脱いでつぎつぎとアイデンティティのステージを変えていくような生きかた、つねにときめいた生きかたというものを意味するとすれば、こうした満ちたりた老いこそ、ファッションのときめきからはもつとも遠い生活だと言わねばなるまい。

隠居という慣習がリタイアするというよりもむしろアイデンティティの別のステージへの乗り換えを意味したように、つまり隠居とはなにもしなくなるということではなく、別のことを開始するということだったように、あるいは改名の慣習というものがひとは生涯複数のアイデンティティがあつて当然だとみなす社会のそれであつたように、アイデンティティが単一である、という固定観念こそが、この生活はくずれるのではないか、つまりは「わたし」がこわれるのではないかといった不安を煽ることになっているのではないか。

知人たちとのある集いでこの話をする、伊能忠敬は隠居してから日本地図を作った、と教えてくれたひとがいた。あるいは別の友人は、^⑦「ピカソはだれよりもうまくピカソをまねることができる」というピカソじしんのことを教えてくれた。ピカソは膨大な数の作品をのこしたから、なかにはじぶんで描いたかわからない作品もある。市場にどんな贋作が^{※5}出まわるので、ある画商が本人に選んでもらうことにした。ピカソは贋作を選びはじめたのだが、そのうち本物をも贋作として選びはじめた。そこで画商が、「あなたが描くところを見てましたから、それはちがうでしょう」と言うと、ピカソは先のようなことばを返したというのである。つまり、これはかつてのピカソが描いたんだらうがおれは認めない、というわけだ。

じぶんはだれか。それをすぐに内部に、つまりじぶんのなかで持続する同一性に求める習慣から一度じぶんをへだてる必要があるそうだ。すぐあとで述べるように、わたしたちの「だれ」はむしろ、他人との関係のなかで配給される。^⑧この関係が、わたしたちにアイデンティティのステージ、それも複数のステージを設定してくれるということ、そこに視線を戻す必要がある。

(驚田 清一『じぶん・この不思議な存在』による 問題作成のために本文を一部変更・省略したところがあります。)

- ※1 無垢……………心身のよごれていないこと。
- ※2 モチヴェーション…物事を行う意欲。やる気。
- ※3 唾棄……………けがらわしいときらうこと。
- ※4 アグレッシヴ…………積極的。
- ※5 贋作……………にせの作品。
- ※6 画商……………絵を売り買いする商人。

問一 本文中の——線部①「人生といえはすぐ、まっすぐな線のように思い浮かべるくせから離れる必要がある」とありますが、その理由を本文中のことばを用いて、二十字以内で、「だから。」に続く形で答えなさい。

問二 本文中の——線部a「勤勉」・b「論理」の本文中における意味として最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- a 「勤勉」……
- | | |
|---|----------------|
| ア | 仕事や勉強に一心にはげむこと |
| イ | まじめに職場につとめること |
| ウ | 目標に向かって勉強すること |
| エ | 幸福を得ようとがんばること |

b 「論理」……

- ア 道徳的なルール
- イ 体系的な知識
- ウ 思考のすじみち
- エ 観察をとまなう思考

問三 本文中の ☐ I ☐ N にあてはまることばとして最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- ア たとえば
- イ たしかに
- ウ どうして
- エ つまり

問四 本文中の――線部②「不安」とありますが、その内容を説明した次の文の ☐ にあてはまることばを、それぞれ本文中からぬき出さない。

人は ☐ ☐ (二字) を想像する時、今は ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ (五字) になることを期待するよりほかない。

それにもかかわらず、☐ ☐ ☐ ☐ ☐ (五字) としてい続けようとすると、☐ ☐ ☐ ☐ ☐ (五字) という存在が

こわれてしまうのではないかという不安。

問五 本文中の――線部③「満ちたりた老らく」とは「満足のいく老年」という意味ですが、それはどのような状態ですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 自分の人生のステージを変え、新たな自分として人生を楽しんでいる状態。
- イ 過去の自分の実績を過大に評価し、他者の話に耳を貸さない状態。
- ウ 若いころに思い描いた夢をかなえ、その経験を常に胸に秘めている状態。
- エ 将来の幸福のためがんばっていた経験に満足している状態。

問六 本文中の――線部④「変化すること、存在がめくれること」とありますが、その内容を説明した次の文の ☐ にあてはまることばを、それぞれ本文中からぬき出さない。

☐ ☐ ☐ ☐ (四字) のじぶんを捨てて、アイデンティティの ☐ ☐ ☐ ☐ (四字) を新たに変えること。

問七 本文中の――線部⑤「貧しさ」とありますが、それはどのようなことですか。その内容を説明した次の文の ☐ にあてはまることばを、それぞれ本文中からぬき出さない。

人はいつでも過去の ☐ ☐ (二字) を断って、つぎつぎと生き方を変えられ、一生のうちに ☐ ☐ (二字) の

アイデンティティがあってもよいのに、☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ (六字) の延長に現在を置いてしまうと、

アイデンティティが ☐ ☐ (二字) になってしまうこと。

問八 本文中の——線部⑥「伊能忠敬」・⑦「ピカソ」とありますが、この二人はどのような人物ですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 「伊能忠敬」は生涯に複数のアイデンティティを持っていた人物で、「ピカソ」は生涯、単一のアイデンティティを持ち続けた人物。
- イ 「伊能忠敬」も「ピカソ」も生涯に複数のアイデンティティを持ち、ある時から、それまでと違う別の生き方をした人物。
- ウ 「伊能忠敬」も「ピカソ」も生涯、同一のアイデンティティを持ち続けたことで、日本地図や膨大な数の作品を残せた偉大な人物。
- エ 「伊能忠敬」は隠居したあとに別の仕事を開始した人物であり、「ピカソ」は複数のアイデンティティがあつて当然だという社会で生きた人物。

問九 本文中の——線部⑧「この関係が、わたしたちにアイデンティティのステージ、それも複数のステージを設定してくれるということ」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 他人とともに、じぶんはだれか、と考えることで、同一性を保ちながら別のじぶんにもなれるということ。
- イ 他人とさまざまな関係をもつことで、我々は新しいステージに生きるじぶんになれるということ。
- ウ 他人との関係が、わたしたちに今とは違うじぶんになれる可能性を、いくつか与えてくれるということ。
- エ 他人との友好な関係が、新しいじぶんという可能性を、いくつもわたしたちに与えてくれるということ。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

翌朝自分は一人で停車場に迎いに行つた。妻も行きしたが、赤児が妙に身体をピクッピクッとさしていたので、自分は来させなかつた。

汽車が着いた。^{※1}隆子が一番先に降りて、^{ろくこ}禄子、^{まさこ}昌子がそれに続いた。^①次に父が降りて来た。自分はお辞儀した。父は何の表情もない顔をして、

「ああ」と言つて軽く頭を下げた。

自分は停車場を出るまで父と余り口をきかなかつた。お互いに多少きゆうくつな感じがあつた。自分はこのきゆうくつな感じはその内にとれてくれるだろうと思つた。このきゆうくつを破ろうとして無い話を無理にするのは反つてよくないと思つた。父も無理に口をきこうとはしなかつた。

皆は車に乗つて自分の家に来た。妻が赤児を抱いて門から出て来た。父の顔を見ると妻の眼からは涙が出かかつていた。^②父は赤児を見ていた。

その日は自分には一日気持のよい日だった。きゆうくつさはすぐ去つた。陶器の事、絵の事などが主な話題だった。自分は自分の持つているわずかな古い陶器や、古い布類などを出して来て父に見せた。父は近頃買った軸物の話などをした。吾々は少しも退屈しなかつた。二人の間では前日の事は何も話されなかつた。しかし父は小さい連中が皆外に出て行つた時に、

「順吉も今後はまた親子として永くつきあつて行きたいという希望だと言うし、それは私にとつても誠に望ましい事なのだから、これまでの事はなかつたものとして、お前もそのつもりになってもらわねばならん」と妻に言つた。

妻は何も言わずに涙を拭きながらただうなずいていた。

(中略)

皆は三時少し前の汽車で帰る事にした。

父は帰る時、また妻に、

「これからは時々来るからね」と言った。

「どうぞ、ぜひおいで遊ばして頂きます」

「どうぞ」と自分も一緒に言った。

自分は停車場まで送って行った。汽車は遅れた。自分は淑子に、

「兄さんはこれから少し忙しいからしばらく東京へは出ない」と言った。側から昌子が見上げて、

「お兄様、でも、今年中にいらつしやるでしょう？ きつといらつしやいね。いい事、きつとよ」と言った。姉達は笑った。昌子には何

か考えがあるらしく、何度もまたこれを繰返していた。自分は未だ満八歳にならぬ昌子の小さな心にもこの和解は決して小さくない出来事だったに違いないと思った。

父は少し疲れたかのように見えた。しばらくして汽車が着いた。皆は乗込んだ。父は自分のいるプラットフォームとは反対の窓の側に腰を下ろした。妹達はこっち側の窓に重なり合って顔を並べていた。

笛がなると、皆は「さよなら」と言った。自分は帽子に手をかけてこっちを見ている父の眼を見ながらお辞儀をした。父は、

「ああ」と言つて少し首を下げたが、それだけでは自分は何だか足りなかった。自分はしかめ面とも泣き面ともつかぬ妙な表情をしながらお父の眼を見た。すると突然父の眼にはある表情が現われた。それが自分の求めているものだった。意識せずにも求めているものだった。

自分は心と心の触れ合う快感と興奮とでますますしかめ面とも泣き面ともつかぬ顔をした。汽車は動き出した。妹達がいつまでもいつまでも手を振っていた。長いプラットフォームを出外れて右へ弓なりに反つてこっちが見えなくなるまで、手を振っていた。自分は誰もいないプラットフォームに一人立っていつまでも洋傘を上げている自分を見出した。自分は停車場を出ると急いで帰つて来た。何故急ぐのか解らなかった。⑤ 自分は父との和解も今度こそ決して破れる事はないと思った。自分は今は心から父に対し愛情を感じていた。そして過去の様々な悪い感情がすべてその中に溶け込んで行くのを自分は感じた。

(中略)

自分にはもう父との不和を材料とした「夢想家」をそのままに書き続ける気はなくなった。自分は何か他の材料を探さねばならなかった。材料だけなら少しはあった。しかしその材料へ自分の心がシッカリと抱き付くまでには多少の時が要った。多少の時を経ても心が抱き付いて行かぬ事もある。そういう時無理に書けばそれは血の氣のない作り物になる。それは失敗である。十五六日までの期日に何か物になる程のものが出来るかしら？

自分はこんな事を考えながらも、またいつか父との事を味わうような気持で考えていた。自分は最近にまた会いたいと思った。自分には二三週間後に会うより今の内にもう一度会っておく方がこの際實際的にもいいような気もしていた。自分はまた何かで父に好意をあらわしたいような欲求から自身の手で得た金でSKに父の肖像画を描いてもらつて贈ろうという事を想い着いた。自分達の事を心から喜んでくれたSKにそれを頼むのも無意味でないという気がした。自分は早速SKに手紙を書いた。

翌朝(九月二日)その手紙を出してから、自分はやはり上京して、父に会い、SKにも会い、その事に早く埒を開けておく方がいいと思つた。

自分は停車場に行く途中、郵便局に寄つて自分宛ての手紙を受け取った。鎌倉の妹からのがあった。自分は歩きながら読んだ。

「今朝早く、寝ている内にまさ叔父さんがいらつしやいまして、嬉しい嬉しいお話伺いました。私は伺っている内に泣き出してしまいました」

自分と妻との名宛てにしてこう書いてあった。自分は涙ぐんだ。

自分は上野からすぐ麻布の家へ行った。父の書齋に一番先に行ったが父はそこに居なかった。仲の口から自分について来た昌子が、

「そんならきつとお庭よ」と言った。

昌子は座敷の縁側から、

「お父さん、お父さん」と大きい声をして呼んだ。父は東家の中から急いで出て来た。父は電話と思つたらしかった。

自分は庭下駄をはいて下りて行った。

二人はこの時もまた、前々日の朝のようなあるきゆうくつな感じで少しかたくなった。自分^⑥は仕方なかった。そのまま肖像画の事を話して、座ってもらえるかどうかきいた。父は快く承知した。

自分が縁へ上がってむこうへ行こうとする時、父は立って何か考えている風だったが、不意にこつちを向いて何か言いそうにした。自分はちよつと戻った。すると父は言いかけた事を、

「ううつ」とそのままにして下を向いた。そして歩き出した。

祖母の部屋へ行こうとすると、途中の部屋で母が寝ていた。母は大腸が悪いと言われたと言っていた。下痢が続いたためと何も食わないために母は疲れ切っていた。

⑦「永い間の事が片付いたので、気の疲れも少し出たかも知れないの」と母は言った。

「そうですか。昨日の事は淑子からお聞きでしょう?」

「ええ。それから康子からも手紙をもらいました。本当にもう安心しました」

自分はそこにはばらくいてから祖母の部屋に行つた。祖母は元気な顔をしていた。それでも床はとつてあつたが、祖母は離れた所に座蒲団を敷いて座っていた。

⑧「今度の事は気持に少しも無理がない点で、僕は大丈夫だと思っています」

「ああ、本当によかった」と祖母は三日前の時とは変わった腹から気持よさそうな顔を見せた。

「お高が(祖母の妹)帰って、お国で皆が寄つた所で話したとッさ。皆は一緒に泣き出したと。あれ、あの手紙に書いて来た」そういうながら祖母は寢床の上に重ねてある二三通の手紙を指した。

「そうですか」自分はその手紙は見なかった。

祖母はまた父が我孫子は思ったよりいい所だと讃めていた事、家や庭の事も讃めていたと、そんな事を言った。その内祖母は黙ってしまった。

自分は何気なく他の話などをしていた。祖母は下を向いて返事をしない。自分で何か想っている内に感動してしまったのだらうと自分は思った。それともまた顎でも外れたかしらという気がちよつとした。祖母はしかし口を固く結んでいる。

※9 女中が来て何か言った。祖母はすぐ口をきいた。

鎌倉の妹が赤児を連れて出て来た。

しばらくすると父が出て来て、

「まさの居ないのは残念だが、今日ちようと皆集まつたからどこかへ飯を食いに行こう」と言った。
山王台の料理屋に行く事にした。自分の汽車の都合で、四時にそこへ行く事にして、そう電話を自身でかけていた。

(志賀 直哉 『和解』による 問題作成のために本文を一部変更・省略したところがあります。)

※1 隆子・禄子・昌子・淑子……………「自分」の妹。

※2 軸物……………掛け軸。

※3 洋傘……………西洋風の傘。

※4 S K……………画家。

※5 埒を開け……………落ち着かせること。

※6 鎌倉・上野・麻布・我孫子・山王台…………地名。

※7 仲の口……………玄関と台所口の間の出入り口。

※8 東家……………小さな家屋。

※9 女中……………お手伝いさん。

問一 本文中の——線部①「次に父が降りて来た」とありますが、この時の父の気持ちとして最も適當なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 「自分」を完全には許していないことを悟らせまいと思っている。
- イ 「自分」の妻と赤ん坊がいらないことを不安に思っている。
- ウ 「自分」の口数が少なくおとなしいことを不満に思っている。
- エ 「自分」との関係をまだきこちないものと思っている。

問二 本文中の——線部②「涙が出かかっていた」とありますが、この時の妻の気持ちとしてあてはまらないものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 安心
- イ 愉快
- ウ 感激
- エ 満足

問三 本文中の——線部③「これから少し忙しい」とありますが、なぜですか。その理由を説明した次の文の□にあてはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

自分は父との□^ア□^イ(二字)を小説に書くこととしていたが、父と□^ウ□^エ(二字)したことで、□^カ□^キ(二字)がなくなってしまう、

小説の内容を新たに考える必要にせまられていたから。

問四 本文中の——線部④「小さくない出来事」とはどういうことですか。最も適當なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 「自分」にあこがれている昌子は「自分」が実家に帰ることを喜んでいること。
- イ 「自分」と一家が仲直りをしたことを昌子が喜んでいること。
- ウ 父と「自分」が再び親子として仲良くなることを昌子が喜んでいること。
- エ 父の機嫌が和解によって良くなることを昌子が喜んでいること。

問五 本文中の――線部 a「しかめ面」・ b「血の気のない」の本文中における意味として最も適當なものを、次のア～エの中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

a 「しかめ面」……

- | | |
|---|--------|
| ア | 不快そうな顔 |
| イ | 満足そうな顔 |
| ウ | 悲しげな顔 |
| エ | 楽しげな顔 |

b 「血の気のない」……

- | | |
|---|------------|
| ア | 感動が生まれない |
| イ | 価値が見いだせない |
| ウ | 構成が整っていない |
| エ | 熱意がこもっていない |

問六 本文中の――線部⑤「自分は父との和解も今度こそ決して破れる事はないと思った」とありますが、なぜですか。本文中のことはを用いて、「と感じたから。」に続く形で答えなさい。

問七 本文中の――線部⑥「自分は仕方なかった」とありますが、その時の「自分」を説明した次の文の□にあてはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

「自分」は父と仲直りしてからまだ日が経っていないため、□□□□□□□□(五字)な、居心地の悪さを感じている。

だが□□□□(二字)にこの雰囲気を変えようとするのはよくないという考えを持っているため、時間が経つことが解決方法だと

あきらめている。

問八 本文中の――線部⑦「永い間の事」とありますが、どのようなことですか。本文中のことはを用いて、八字で答えなさい。

問九 本文中の――線部⑧「気持ちに少しも無理がない」とありますが、なぜですか。最も適當なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 康子や妹の後押しもあり、父に対しての気持ちにゆとりができたから。
- イ 自己の感情に素直になり、父からの謝罪を受け入れることができたから。
- ウ 父に対する不満はほとんど解消され、口に出すほどの怒りはすでにないから。
- エ 友人・家族などの他者から強要されたのではない、自然な仲直りだったから。

問十 本文の表現の特徴として合っているものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 「自分」や父、妻や妹といった複数の視点が織り込まれ、登場人物の心情が描写されている。
- イ 「自分」と父との和解に伴う周囲の人々の喜びが、「自分」の視点から書かれている。
- ウ 「自分」を中心とした家族問題が、「自分」が遠い過去を回想するという形式で語られている。
- エ 「自分」が登場人物の内面に入り込み、心情を的確に推測している場面が各所に配置されている。

英數特科第一
特別進學第一
一回

座席番号
受験番号
氏名
評点

□

問 一	
④	①
⑤	②
	③
	める

問 二	
④	①
⑤	②
	③

問	
④	①
⑤	②
	③

[illegible][illegible]

問	a		b	
---	---	--	---	--

問三						
I						
II						
III						
IV						

問四	
ウ	ア
	イ
エ	

問五

問六	ア				
	イ				

問七	
エ	ア
	イ
	ウ

問八	
問九	

10

問		問	
---	--	---	--

問三
ア
イ
ウ

問四	
問五	
a	
b	

問六	
	と感じたから。

問七
ア
イ

[illegible]

問九		
問十		

